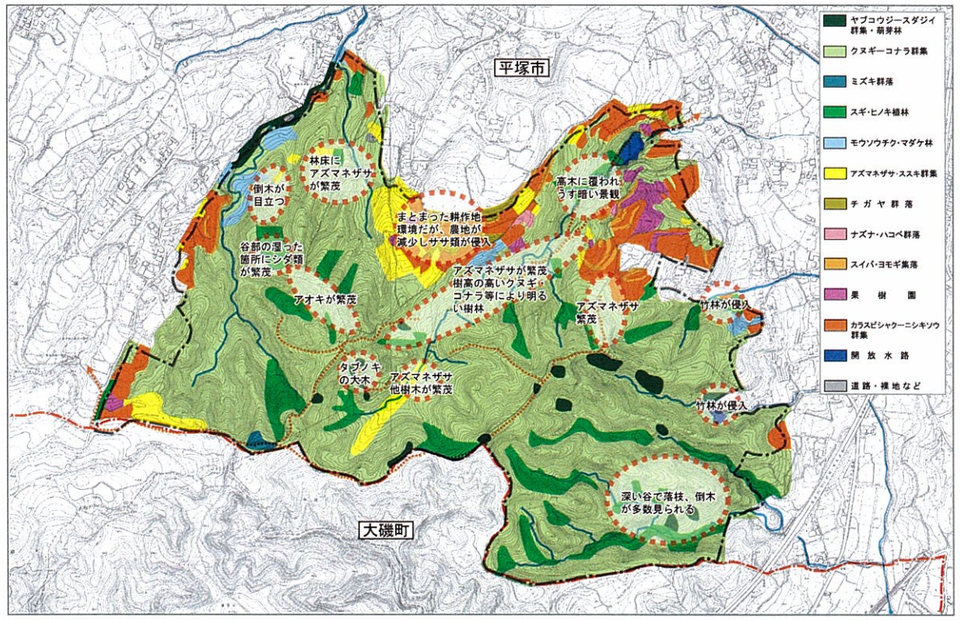
【 「湘南ひらつか・ゆるぎ地区」の里山について 】

（１）植生の変化

里山の大きな特性として、林床に様々な植物が生育する高い生物多様性が挙げられる。しかし、人の手が入らなくなったことで、ササ類の異常繁茂や常緑樹の増加など状況が変わってきていると考えられる。

平成3年に実施した独自調査による植生図をベースとして、その変化を以下に示す。



①クヌギーコナラ林の高齢化

薪炭林としての需要がなくなった1960年頃からほぼ50年たった現在、樹齢60年以上の樹林が大半を占めていると考えられる。伐採後の萌芽能力は、樹齢が増すにつれて衰えると言われており、クヌギーコナラ林の再生力の低下が危惧される。

②アズマネザサが繁茂

大半の流域は、管理されないまま放置されたことで、林床一面にアズマネザサが繁殖している。

アズマネザサが密集しているところでは、地表面に光が届かなくなり、ササの落ち葉が堆積するため、他の種子が発芽できない状態となっている。

③常緑樹林化

アズマネザサが繁殖していない場所でも、アオキ等の常緑樹が侵入してきている箇所が見られる。

常緑樹が増えすぎると、林内に差し込む光が減り暗くなるため、林床で生育できる動植物も限られてくる。

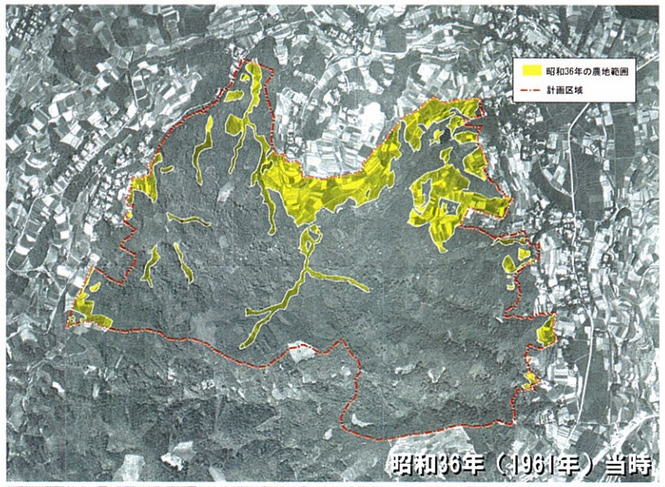
④竹林の拡大

耕作が放棄された畑に竹林が侵入してきており、そういった場所では、竹以外の植物がほとんど見られず、極めて単純な植生となっている。

（２）農地の縮小化

昭和36年（1961年）当時には、里山の奥（南側）まで農地（水田）として利用されていたが、平成19年（2007年）当時の写真では森林化していることがわかる。

このように、人が農地に行かなくなることで人と里山の関係が希薄になり、里山には見られなかったイノシシやシカが現れたり、また雑木林のヤブ化が進行していると考えられる。



（３）景観や農業環境の悪化

人の手が入らなくなりヤブ化した里山は、景観や防犯上の環境を悪化させ、不法投棄の格好の場となっている。

また、農道をササ類が覆い農耕車の通行の妨げになったり、良好な農地に迫り日照や通風の悪化など営農環境にも影響している。